

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻 裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8 階 (〒100-0011)

電話 (03) 3503-3829

FAX (03) 3503-3828

<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.35 No.1
2011.1.1
(通巻 205 号)

日本新聞製作技術懇話会
会 報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

年頭のご挨拶	日本新聞製作技術懇話会 会長 芝 則之	3
	日本新聞協会技術委員会 委員長 清水 忠	4
新聞協会賞を受賞して「Win Win を目指して～東阪統合組版システム」	日刊スポーツ新聞社 情報センター兼編集制作センター副センター長 山中 俊幸	5
読売新聞東京本社「銀座仮社屋」へ移転完了	読売新聞東京本社 制作局技術三部長 新井 豊	7
楽時万歳	宮崎日日新聞社 取締役印刷・システム担当 筒井 育夫	9
	(株)金陽社 取締役営業本部長代理 島 光一	10
第34回国内研修会記		11
会員社リポート	日本ボールドウィン(株)、ニッカ(株)	12
	(株)椿本チエイン、(株)日立製作所	13
第36回年末全体会議開く		14
第107回技術懇談会記(酒井寛氏への感謝の集い)		14
会員名簿		15

- 表紙写真提供：富士フイルムグラフィックシステムズ(株)・富士山
- 表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

将来見通せる節目の年を期待

日本新聞製作技術懇話会 会長 芝 則之



明けましておめでとうございます。謹んでお慶びを申し上げます。

百年に一度といわれたリーマンショックから、3回目のお正月を迎えました。欧米をはじめ日本経済も痛手を克服し、だいぶん回復したのではないかとされていますが、実感としてはどうでしょうか。日本企業の好業績も海外での収益が主で、GDP（国内総生産）成長率に大きな比重を占める設備投資や個人消費とは結びついていないのが現状です。ことに、新卒者の就職難は最悪で、若者の消費性向の減衰もさることながら、将来の企業社会に対する漠然とした不安は見逃ごせないものがあります。

*

*

私ども新聞業界を取り巻く環境もいぜんとして厳しさが続いています。09年10月現在の新聞総発行部数は5,035万部を数えますが、ここ2、3年は数万から十萬部単位の減少になっております。一方の新聞広告費も09年実績を見ますと、6,739億円と近年は前年比90%台前半から80%台の水準で低迷しているというのが実態です。会員各社におかれましてはいろいろご苦労があったと推察いたします。

そんな厳しい環境下ではありますが、CONPTは例年にも増して元気に活動続ける所存です。恒例となっているお正月の新聞

製作人名刺交換会、10月10日～12日にウィーンで開催されるIFRAエキスポにあわせたCONPTツアーなどがメインの行事となります。春秋年に2回の国内研修会と適時新聞印刷工場や他分野の先端技術を見学する技術研修会もあります。会員同士の親睦と研修・視察の機会を提供するCONPTの役割はいささかも変化ありません。

ただ、JANPS（新聞製作技術展）は次回から諸般の情勢で2年おきから3年に一度とし、第21回は来年11月開催を予定しております。JANPSを今まで以上に盛り上げるため、新聞協会と検討会議を設けました。ユーザー側である新聞各社のご意見を取り入れつつ、次回のみならず将来にわたった振興策を協議しています。

*

*

インターネット、モバイル機器などの社会への浸透はめざましいものがあり、今年も新たな話題が絶えることがないでしょう。新聞の電子版もその中でどう進展していくか、注意深く見守る必要があります。オンラインサービスと新聞紙の共存共生が、社会にとって望ましい姿だと考えます。CONPT会員各社は、新聞が生き続けていく上で、大きな力になるようなアイデアを提供していきたいと考えます。

この2011年が新聞業界にとって将来を見通せるような節目の年になるよう祈念いたします。

2011年は変革の年

日本新聞協会技術委員会 委員長 清水 忠



新聞社が、自社の新聞製作システムを持ち紙面を製作し、自社の印刷工場で印刷して専売店を通じて、読者に配達する時代が変わろうとしています。

1980年代、鉛活字からCTSへ大きな変化を経験してきたが、それからの20数年間は、いかに効率的・安定稼働を目的とした紙面製作システムを自社で開発・管理・運営していくことが新聞技術者の業務課題でありました。しかし、新聞製作系システムもパッケージ化・汎用化が進むにつれて、もう自社でシステムを持つ限り、これ以上の効率化は難しい状況になってきました。このようなユーザの要求に答える形で、共同通信社のシステム共有化、メーカー側の共有化の提案が出されてきました。

*

*

新聞社の技術者もこのような新しい流れに対して、どのような役割を担っていくかが、今後の大きな課題です。

また、新聞印刷の方は、今まで20年サイクルで工場更新を行ってきましたが、その前提となる印刷部数が、維持できなくなってきました。より新鮮な記事を多くの読者にという目的で、全国に印刷工場を建設してきましたが、新聞より新鮮なニュースはネット・携帯・モバイル端末でという時代になったのは事実

です。新聞の役割も変わろうとしています。効率的な印刷を行うために版次の見直しを行い、各地で展開してきた印刷についても、更新時期を契機にセット数の適正化を進める必要に迫られています。

新聞社も一般製造業と同じ考えにたてば、生産コストの削減でなにをしなければならないか見えてきますが、技術者として関わることのできることは、原材料(新聞で言えば記事・写真)以外のコスト削減です。新聞技術者は、新聞の品質を落とさず生産の更なる効率化を行う命題をかけられています。この点について既に、先進的に効率化を進めているCONPT加盟社にご教授いただければと思っています。

*

*

今動き出そうとしている変革は、序章かもしれません。10年、20年先には、スマートコミュニティが具体化し、その中で情報発信としての新聞社が、どのようなポジションをとるかが課題になってくると思います。

時代が求める変化にCONPT加盟社と新聞社とが共に切磋琢磨して対応し、発展していくことが大切で、その潤滑油に新聞協会の技術委員会が微力ながらお手伝いできればと考えています。



新聞協会賞を受賞して

「Win Winを目指して～東阪統合組版システム」

日刊スポーツ新聞社 情報センター兼編集制作センター副センター長 山中 俊幸



日刊スポーツ新聞社と方正株式会社の共同開発である「東阪統合組版システム」が2010年2月1日に東京本社で即日全面移行した。同年3月1日に西日本本社、4月1日にはレ

ースセンター（西日本本社を制作拠点とした全本社レース面制作部門）運用がスタート、移行開始から2ヶ月で全面稼働となった。発生バグ数も100件以下で推移しており安定している。

システム構築の目的は以下の通りである。

- (1) 初期導入費、保守費、人件費の大幅抑制
- (2) 突っ込み対応を可能にする高性能組版
- (3) 整理単独組版、出稿記者組版を実現し得る多彩な大組機能と操作性
- (4) 降版間際の状況に対応するため、大組と素材修正作業を1対n台且つ同時並行処理
- (5) CTP自動製版に対応できる紙面管理機能、広告連携機能、出力機能を有すること
- (6) 紙面や素材をデジタル配信するための統合データベース連携機能
- (7) 素材管理と連携した自動組の推進
- (8) 東阪連携と障害対応

今回の統合で初期導入費、年間保守費ともに50%以上を削減。大幅なコストダウンを実現した。



スポーツ紙の組版は多種多彩な機能、高速出力が必要である。市販DTPの自由度と、組版のスピード、簡便性を両立させねばなら



東京本社の制作風景

ない。我々が選択したのは方正。提案内容は「日刊が求める全てをパッケージとして実現する」というものであった。さらに当社と日本方正をフィールドSEと位置づけ、北京方正に開発を発注する「オフショア開発」でコストを大幅に抑制しようという提案内容であった。

大規模システム構築経験の不足、物理的な距離、何より言葉の壁…。リスクは挙げればキリがなかったが、何よりコストが魅力だった。



GUIを含む外部設計まで踏み込み、1600頁を超える要求仕様書を作成した。機能の羅列ではなく「なぜ必要か」「どういう風を実現したいか」を具体的なイメージと明確な言葉で説明した。また、「方正がどう理解したか」を執拗に確認した。北京方正翻訳部門に対して機能および新聞製作運用を徹底的にたたき込んだ。その後、開発部門に要求仕様書の説明を「なぜ必要か」に絞って繰り返し、理解度を計る問題集を作成した。SEに文書で回答さ

せて翻訳、それをユーザー側で添削・翻訳・再説明する等、相互理解の徹底に努めた。

要求仕様書は機能の羅列であってはならない。「なぜ必要か」「どう使いたいか」を明確に提示できること、それを繰り返し説明する手間を惜しまないことがオフショア開発成功のキーであることを体験として学ぶことができた。反面、これだけ準備をして臨んでも、遅れるシステムは必ずユーザー側にも問題があるのだということも痛感した。

方正はSE個々の優秀さを活かし、開発手法としてセル方式を採用した。1人あたりの担当範囲が広いため、コンポーネント単体レベルでのシステム品質が高い分、内部連携が必要な結合テスト以降の品質や進捗に課題を残したが、追加要件がほとんどなかったことが幸いした。

運用者である整理部も通常業務の合間を縫って1人当たり30～40時間以上の研修を実施、ユーザーテストでの擬似本番紙面製作は東阪1500枚を超えた。

言葉と距離の壁を乗り越えた両社開発メンバーの情熱と、ユーザーである整理部のテスト参画が即日全面移行につながったと自負している。

新聞業界はかつてない変革の波にもまれている。電子新聞など、ビジネスモデル創出とデバイスの模索がトレンド。そんな中、枯れた技術になっている組版システムでの受賞である。「どうしたら相手に正しく理解してもらえるか＝設計、説明、確認」に力を注いだ当社の取り組みが評価されたのなら、これに勝る喜びはない。

この仕組みを使って、整理記者は紙以外の媒体に業務範囲を広げていこう。デバイスが何であれ、新聞社が出稿、編集をしていくことに変わりはない。

いつか組版が、新聞社にとって「One of

them」のシステムになることを祈りつつ…。

【最後に】図抜けた技術力と集中力を武器に、当社が要望するシステムを高品質、低コストで実現していただいた方正株式会社と、プロジェクト管理にご助力いただいた株式会社ソリューション・オフィスの唐津麻仁成氏、株式会社フォーナインシステム・西谷文男氏に厚く御礼申し上げる。

プロジェクトメンバー

今橋 誠(全体管理、東京移行リーダー)
大神 朋久(全体管理、大阪移行リーダー)
古和田秀明(テストリーダー、紙面管理・出力管理担当)
佐藤 善也(上流システム連携)
瀧尻 秀人(組版端末設計担当)
狩俣 祐三(組版端末設計担当)
二木 康充(組版端末テスト・移行担当)
中野 利一(画像設計担当)
小松 直樹(画像、DTP連携担当)
黒澤 光昭(紙面管理、工場連携担当)
菊池 弘志(自動組担当)
加藤信太郎(文字管理、統合DB出力担当)
樋渡 友樹(統合DB連携担当)



プロジェクトメンバー集合写真

読売新聞東京本社「銀座仮社屋」へ移転完了

読売新聞東京本社 制作局技術三部長 新井 豊

2010年9月、読売新聞東京本社は本社ビル建て替えのため、大手町から銀座仮社屋へ移転した。準備期間が短く、厳しいスケジュールであったが、大きな障害もなく移転することができた。本移転における情報通信設備の移設について紹介する。

まずは、今回の引越しの実務を取り仕切った総務局・大浦次長の社内報原稿の一部を引用させて頂こう。

「わずか4ヶ月の準備期間で什器も丸ごと移転する。これは3000人規模のオフィス移転では稀有であり、日経新聞も新規什器を先行配置し、準備も約2年間あったという。社内の先輩からは、『成功したら奇跡だ』とまで言われた。」

今回の移転の成功は、世間常識から言ったら奇跡かもしれない。仮社屋のレイアウト作成や引越し実務を担当した社員の作業量は尋常ではなく、彼らの体が持つのかと心配になったくらいである。読売全社員の底力で乗り切った引越しだったと言って良いだろう。

われわれ制作局は、ネットワーク、電話、システム・サーバー、端末など情報通信インフラの移設を担当した。準備期間も少なく、経費も極力掛けないという厳しい条件下での移転ではあったが、「新聞制作」に支障を出さずに移転を完了させることは、至上命題であり、これを『奇跡』に頼るわけには行かなかった。

銀座社屋のネットワーク構築を最重要と考え、その正常性確認を徹底的に行った。また、サーバー移設では、可能な範囲で作業を分散し、リスク軽減に努めたことが成功に繋がった。

今回の移転が成功した最大の要因は、以下の4つと考えている。

- ネットワークの構築(WANまたぎの同一VLAN)
- サーバー類の事前分割移設
- 一部の組版端末の事前設置
- 編集局の2段階移転を含めた分散移転

〈ネットワークの構築〉

読売の新聞制作系・業総務系の基幹システムのほとんどは、府中SC(システムセンター)に設置しており、端末はこれに接続して処理を行っている。拠点が大手町から銀座に移っても、ネットワークさえ正常であれば、問題が起きるはずがない。

銀座ネットワークが本番並みとなったのは、編集局移転の第1段を一週間後に控えた8月29日である。同日、銀座に移設したサーバー類と事前設置した組版端末を使って、ネットワークの正常性を確認した。この時点で「情報通信系移転の山は半分越えた」と思ったものである。

特に今回のネットワーク構築では、大手町、銀座、府中のうちの2拠点で、同じVLAN(同一IPアドレス)構成を取れたことが、非常に有効であった。このお陰で、サーバーや端末を移設する時に、IPアドレスの変更作業が不要となり、リスクと費用を大幅に軽減できた。もし、同一VLAN構成ができなければ、サーバーを半日の内に移設して、運用を再開することなどは不可能で、サーバーの二重設置が避けられなかった。そもそも半年間で、システムをもう一つ準備することは無理だったと思っている。

〈サーバー類の事前分割移設〉

上で「基幹システムのほとんどは府中SCに設置している」と書いたが、とは言っても大手町に全くシステム・サーバーが無かったわけではなく、これらを安全に運びだすことも

課題の一つであった。

大手町には、ゲラ用プリンタサーバーや英字サブシステムの他、業務系の小さなシステムがいくつもあった。特に大物は、読売のニュースサイトであるYOMIURI ONLINEを編集するオメガシステムである。表のように、18システム、28ラックのサーバーを移設する必要があった。

3年半後に再び大手町に戻すことを避けるため、可能な限り府中移設とし、それも前倒しで行った。銀座へ移設するサーバーは、ネットワーク環境が整うのが8月29日であったため、多くはその日の移設となった。

10ラックにも及ぶオメガシステムやゲラサーバーは、負荷分散、リスク軽減のために、複数回に分けて移設した。また、停止時間を最小にするため、ほとんどラックに搭載したまま移設した。ラックから外して移設するより、相当の時間の短縮ができたと思っている。

〈一部の組版端末の事前設置〉

編集局本体(ニュース面提稿部、編成)の移転は9月12日の休刊日。どんなことがあっても、翌日の夕刊発行に支障が出てはならない。そこで、予期せぬ事態が発生して組版端末が移設できなくても、夕刊が最低作成できる台数の組版端末は事前設置しておくことにした。(この組版端末を使って、8月29日のネッ



銀座仮社屋マシン室への、サーバー搬入作業(8月29日早朝)。

サーバーをラックに搭載したままの移設。天井が低く、ラックを斜めにしているの搬入となる。

トワーク確認を行ったわけである)

これには、元々ハード老朽化で更新用として購入していた45台を充てた。

〈編集局の2段階移転を含めた分散移転〉

編集局の移転をいっぺんに行うのは危険と考え、県版・特集面とニュース面の2段階に分けた。作業負荷の分散もあるが、先ず、県版・特集面を移転し、1週間の運用を行うことで、ネットワークを含めたシステム環境を確認できると考えたからだ。

第1段の移転も順調で、いよいよ12日の編集本体移転となったが、予想していたとはいえ、その物量の多さは圧倒的で、スケジュールは押せ押せとなった。何とか19時からの紙面制作リハーサルに間に合ったが、もし、2段階に分けていなかったら、大変なことになっていたはずだ。

また、編集以外の局は、土日だけでなく平日昼間の引越しも行った。1日～26日、9月はほぼ毎日どこかの部署が引越していたという状態だった。費用削減のためではあったが、負荷分散・リスク軽減という費用以外のメリットも大いにあった。編集局のように業務に支障が出る部署は仕方がないが、それ以外は、平日昼間に行って正解だった。

電話回線についても、説明しておこう。

「読売さんは、大手町から銀座に移転したのに、何で電話番号が変わらないの?」という質問を良く頂く。確かに疑問に思われることだろう。電話番号は新聞社にとって、大事な看板である。今回の銀座移転と3年半後の大手町再移転の2回も電話番号を変えるわけには行かない。銀座仮社屋でも同じ番号を使いたい。難題であったが、NTTコミュニケーションズの協力で解決することができた。

魔法の種明かしは、「NTTコムの手町データセンターに読売のIP電話交換機の一部(外線を収容するゲートウェイ)を設置した」である。銀座に移った今でも読売新聞東京本

社は、丸の内局、千代田局からの電話回線を使用しているのである。大手町旧社屋の近くに、たまたまNTTCOMのデータセンターがあったからできたことだろう。

読売社内では、新社屋建設を「ブーメラン作戦」と呼んでいる。いったん銀座に移って再び大手町に戻ってくるからだ。まだ「ブーメラン作戦」の第一弾が終わったに過ぎない。これからは、旧社屋の解体、新社屋の設計・建設、そして再移転と続く。われわれの仕事も、新社屋の情報通信インフラ構築にシフトしていくことになる。

移転・運搬を担当した日本通運、ネットワークのNTTコミュニケーションズ、そしてサーバーの移設をお願いした各メーカーの皆さんの絶大な協力により、今回の移転が成功した。この場をかりて、改めてお礼申し上げる。

大手町本社から移設したシステム一覧

No	システム名	移設先	ラック数	移設日
1	ニュース配信	銀座	1	8月29日
2	ユーザ管理	銀座	1	8月29日
3	業務系プリントサーバー	銀座	1	8月29日
4	共済会	銀座	1	8月29日
5	写真受信・蓄積	銀座	1	8月29日
6	出力ゲラコントローラ (プリントサーバー)	銀座	2	8月29日 9月23日
7	英字サブサーバー (プリント、実画像蓄積)	銀座	1	8月29日
8	役員在籍表示	銀座	1	8月29日 9月29日
9	無線リモコン	銀座	1	9月11日
10	yorimo会員管理	銀座	1	9月17日
11	オメガ(YOL編集)	府中	10	7月21日 7月25日 8月1日
12	外販DB	府中	1	7月26日
13	サイトアクセス集計	府中	1	7月26日
14	政治資金	府中	1	7月26日
15	販売サブ	府中	1	8月22日
16	業務系運用管理	府中	1	10月3日
17	汎用アプリケーション	府中	1	10月3日
18	作業・障害管理	府中	1	10月3日
	合計		28	

楽事万歳

晴耕雨読を夢見て

宮崎日日新聞社
取締役印刷・システム担当

筒井 育夫



昼休みに近くの大型書店をのぞくのが日課である。新刊コーナーを皮切りに店内をひとめぐり。目についた本を読む至福のひとつ、休憩時間はあっという間に終わる。世

相を映して年金の解説本も多彩。受給開始まで数年あるものの、リタイア後の人生を夢想することがある。

「晴れた日は菜園で土に親しみ、たまにはゴルフに興じ、雨天なら池波正太郎や山本一力の時代小説を楽しみ、碁敵と盤を囲む。日が暮れば愛猫を傍らに晩酌をしつつ、ニュース番組キャスターの解説ぶりを批評する。ボランティア活動をそれなりにやる。お迎えが来たときは観念して延命措置を拒否、身内に見守られて旅立つ」。



実現には経済的な裏付けがいるので、年金定期便の加入記録を調べてみた。学校法人○△大学、株式会社宮崎日日新聞社。勤務歴や掛け金支払額に間違いはなさそうだが、受給予定額は、営々と働いたのに…心もとない。

けれども「起きて半畳寝て一畳」と思えば気楽だ。宮崎特産の芋焼酎代ならたかが知れている。酒肴は作り慣れたゴーヤ、枝豆、インゲン、里芋、ショウガなどでいい。無農薬、虫食い、形が少し悪くても旬を味わえる。自宅周辺には安く遊べるゴルフ場もあちこちにある。考えようによってはぜいたく、地方に住む幸せであろう。

肝要なのは家人からの自立。身の回りのこ

とを含めて家庭内の諸事一切を任せきりでいる。勤めに精出すかわり亭主関白を黙認してもらっているが、給料を運べなくなった時はそうはいくまい。彼女が第二の人生を自由に楽しめるような配慮も必要だろう。従って、粗大ごみ扱いされる前に「ボクハ、アンタから、乳離れます」と決死の覚悟で宣言、実行しなければならない。

◇ ◇

父の急死で勤労学生となった。幸い、在学していた大学の事務補助職に就いた。採用してくれた担当課長は私のどこを気に入ったのか、人手が足りないから誰でもよかったのか今となっては確かめようがない。生活費と学費を稼がせてもらったうえ、回り道をせず卒業できたのだから、結果的には彼との出会いで人生が開けた。恩人の一人である。

勤務場所は文学部の読書室だった。構内にはあちこちに立て看板、机といすでのバリケード、アジ演説、内ゲバ騒ぎがあった。室内はシンとしてページをめくる音だけ。喧騒と静寂の中でのキャンパスライフだった。登校して講義を受け、夕刻から職員となる。数多の書籍に囲まれて利用者の学習に何がしかの手伝いができる喜び。自らの専攻科目の勉強は宮崎弁で言う「てげてげ」（いい加減、適当）だったが、勤務を通じて学んだ社会学はその後の人生に役立っている。

◇ ◇

さて、ボランティア活動。多種多様あるうが、やるなら近くの公立図書館と以前からひそかに決めており、図書館のホームページで募集の有無を時折チェックしている。「整然と本が並んだ書架が好きなのです。雑用でもトイレの掃除だって何でもやります。決して出すぎたことはいたしません」。応募時のセールス文句をあれこれ考える。

首尾よく仲間に入れてもらえたら、紙と活字の文化と魅力(新聞を含めて)を利用者、特に母子に伝えたい。そうすることが、元々は

製本工であり印刷所や新聞社に勤めた亡父へのささやかな供養と思っている。

引退後の予想・希望・夢

株金陽社 取締役営業本部長代理

島 光一

突然の原稿依頼を受けていささか戸惑って居りますが、何時の間にか61才を超えてしまった今日この頃、引退後はどうするのかと周りから問われる事がまま有ります。団塊1949生まれ・丑年のB型である小生は無自覚で全く心配をして居りませんが、周りはどうでもないらしいので自分の引退後を予想してみます。

よく聞くのは蕎麦打ち・家庭菜園・日曜大工・ゴルフ・釣り・カメラ・囲碁・将棋・陶芸・絵画・おじさんバンド・カルチャースクール・自分史等ですが、運動・音楽すべてに於いて音痴の小生は今一つテンションが上がリません。それでも多分…だろうかと予想してみます。

A日常的予想。

- 1-新聞・TVニュース・ドキュメンタリー・映画「潜水艦・藤沢周平」・図書館で乱読。：広く浅く易しい生活情報・雑学が好き。
- 2-テント持参は無理なので低山ハイク。：ザックは軽くなるが、自分が重くなっている事に膝が耐えられるだろうか？
- 3-錆びた自転車を磨いてサイクリング。「ツールド佐渡」出走？が夢。：筋肉が落ちてスマートになった太腿・膝が臍の周りの豊富かつソフトな贅肉を圧迫するでしょう。完走は無理！
- 4-蕎麦打ちでなく饅頭打ち。：蕎麦は難しいらしい。饅頭は簡単？

ここまではたいして金も掛からず、何とか可能でしょう。

B非日常的希望・夢。

- 1-地震の無いところに住みたい。：兎に角地

震が嫌い・怖い。若い頃は岡山とっていたのですが。

2-海岸線のドライブ「積丹半島・下北半島・五能線・笹川流れ・能登半島・西伊豆・若狭湾・宇和海足摺岬他」：美しい海岸線・美味しい海の幸と地酒。二輪は危険、赤いBMW318でワイフと。

3-デュッセルドルフに1年滞在。北海からライン川とドナウ川を通過して黒海までの河船旅。何もせずにひねもすのたりかな。松江での中学一年の地理の授業以来の完璧な白日夢。船上での赤ワインとソーセージとジャガバター。

然しこれ等は多大な財力を要し、実現は無理な夢でしょう。

せめてA群位はと思いますが、冷静に考えれば炬燵に潜った猫の如くが実像でしょう。簡単なA群でさえ実現するには金と健康が必要です。金銭的課題は如何ともし難いのですが、体力維持は個人でコントロール可能な領域です。

言うだけですが減酒・減量でメタボを改善することが重要と反省します。はたしてどのような引退生活になるか、全く考えも心配もして居りませんが、縁があれば10年後に改めてご報告致します。

第34回国内研修記

ー岐阜新聞制作センター見学会ー

岐阜新聞制作センター様にて11月19日に開催された。同センターは2009年12月に本格稼働された東京機械タワー型高速シャフトレスオフセット輪転機設置の工場で、金華山を後ろに控えた市内に建設されていた。岐阜県は高山祭・郡上おどり・全国花火大会・1300年の伝統を持つ長良川の鵜飼・世界文化遺産の合掌集落等四季折々の祭事、イベントに富んでおり、新輪転機により色鮮やかな情報を郷土岐阜に発信されている。また、2011年7月には創刊130周年を迎える歴史のある新聞である。

先ず、岐阜新聞高速印刷株式会社田辺常務取締役工場長様、宮部副工場長様、岐阜新聞社小森総務局副局長様によるご説明を受け、綺麗な新製作センターのご案内を頂いた。

新製作センターは、輪転機室の天井を高くして空調効率を高め、トラックヤードから立体紙庫への巻取用紙、インキコンテナの3階部分への流れ等エコを意識されたつくりとなっていた。また、当日も小学生の見学があり、



岐阜新聞社前にて

年間約5000人の見学があるとのことで地域との密着度の深さがうかがえた。工場設備は、巻取用紙は72本／約2日分を立体紙庫に保管されており、無人システムで給紙部へ運ばれ自動装着される。印刷機は毎時13.5万部／時、16面カラー印刷が可能である。

見学後の質疑応答と夕刻の懇親会も含め大変有意義な研修会であり、岐阜新聞社青木常務取締役様、小森総務局副局長様、岐阜新聞高速印刷株式会社田辺常務取締役工場長様、宮部副工場長様に厚く御礼を申し上げます。

(サカタインクス 武田勉記)

現場の声をつねに反映

日本ボールドウィン株式会社は、1968年の創立以来「印刷現場の声を聞く」「お客様に満足を」を共通のモットーとするボールドウィン・グループの一員として展開してまいりました。印刷業界と社会の発展に貢献すべく、国際性を活かし、印刷機械周辺機器等専門メーカーとして技術開発力と品質を一層高め、お客様の生産性向上・省力化等に寄与する製品とサービスをご提供して参りました。

当社主要部門の一つである新聞印刷関連の製品としては、既に各社より高い評価を頂いている湿し水供給装置、各種洗浄装置があります。これらを、さらに高速化、軽量化および保守性向上を達成し、高性能湿し水供給装置、上下2胴の同時洗浄を可能にしたブランケット洗浄装置としてラインナップに加えま

した。

また既存の製品カテゴリに加え、環境への配慮に対する要求の高まりから検討されている規制強化にも対応する商品もあります。新聞印刷工場から排出される湿し水排水を地域の排水基準に合わせ処理する排水処理装置や、印刷品質向上だけでなく各種コスト削減にもつながる湿し水の純水化装置といった製品もご提供開始しております。

さらには製品の販売だけでなく、よりきめ細やかなアフターケア、メンテナンスサービスのご提供を目指し、お客様に合わせた定期サービス保守契約等のご提案も行っていきたいと考えております。

今後も貴重な「現場の声」を製品の質向上と開発に反映させ、お客様に求められる商品とサービスを提供できるよう努めて参りますので、ご愛顧の程よろしくお願い申し上げます。

日本ボールドウィン(株)

ニッカグループのご紹介

1958年に創業、ブロッキング防止パウダー「ニッカリコ」を開発し、その分野のパイオニアとしてスタートしたニッカ株式会社は、その後パウダー散布装置から機械製品の製造販売に参入し、今日の新聞印刷周辺機器に至っております。今回は当社を含めたニッカグループについて簡単にご紹介します。

ニッカグループは当社を中核に、金属検出器をはじめとする検査装置・セキュリティ製品の総合メーカーである「ニッカ電測株式会社」。シール不良検査装置等の品質管理装置を手がける「ニッカ検査機械株式会社」。印刷用湿し水冷却循環装置等を製造販売する「ホーム工業株式会社」。そして各種消耗品の開発製造等を行う「有限会社エヌテック研究所」とUV装置・UVランプの開発製造を行っ

ている「株式会社東通研」で構成され、今後一層需要が増す生活や食の安全をサポートする企業も有するなど、印刷業界とは異なる様々な分野でも活躍しているバラエティに富んだ企業体です。

また国内にとどまらず、ドイツ・韓国・米国・中国にもグループの拠点を設け、グローバルな活動を行っております。中国・上海の拠点には昨年まで皆様に可愛がっていただきました当社新聞機器本部の責任者が赴任して、新聞社様に鍛えられたその能力を現地でも如何なく発揮しております。

この度組織変更に伴い、当社新聞機器本部は商業印刷も含めたオフセット印刷機器本部に生まれ変わりました。新しいスタッフも加わり心機一転、さらに皆様のお役に立てるよう努力してまいります。今後とも変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

ニッカ(株)

「エコ&エコ経営」目指す

今、地球環境問題は企業に大きくのしかかっていますが、当社グループではこれを経営課題の一つと捉えて取り組んでいます。モノづくりに携わる企業は、事業活動での環境対応はもちろんのこと、環境負荷低減に貢献する商品を開発し成長につなげることが不可欠であり、ここに環境ビジネスの重要性を認識しています。

当社グループでは環境配慮技術の開発・応用により、商品のエコ化を進め、環境面と経済性を融合させるEco-Eco (Ecology & Economy) の企業経営を目指しています。

新聞印刷業界を担当するマテハン事業部では、製品の設計、製造、使用、廃棄などのライフサイクル全体において環境配慮を行う「環境適合設計」を基本とした独自の「エコ設

計ガイドライン」を定めています。設計段階から素材、部品、製品に対して小型・軽量化などの省エネルギー化や長寿命・リサイクル容易性などの環境配慮の視点を取り入れることでコスト低減や安全性アップにつながり、お客様の満足向上になるものと考えています。

2008年にリリースした「つばき給紙AGV MARK II」は、エコ&エコの代表製品として、従来の給紙AGVを大幅に小型・軽量化しました。モータやバッテリーの設計を見直し台車本体の30%軽量化、24%の消費電力低減を実現しています。さらに消耗部品の寿命向上や、部品の交換・再整備によるリユースを図っています。

椿本チエインは今後も納入設備の安定稼働、長寿命化に貢献し、お客様にとって面見の良い企業を目指します。

(株)椿本チエイン

印刷工場にフレンドなサービスを

弊社が新聞印刷工場のシステムに携わり始めてから約30年が経過いたしました。その間、新聞発行に関わる技術革新は大きく変革し、また、システムを支えるハードウェアやソフトウェアのアーキテクチャも大きく飛躍して参りました。

弊社は、新聞発行の技術革新に応えるさまざまなシステムを、その時々最新のアーキテクチャによりご提供して参りました。

今後も、新聞印刷工場の経営環境の変化に応じた情報・生産・環境関連製品でお役に立てるサービスをご提案して参りたいと考えております。

まず、ITの要であるハードウェア・ソフトウェアではサーバーやストレージ、通信技術、データベース、WEB、セキュリティ、

トレーサビリティ等最新技術を活かしたインフラをご提供して参ります。

また、豊富なシステム構築の経験により、フレンドリーでかつ信頼性の高い生産管理システムをご提案することが可能です。

製版管理(CTPサーバー)、部数管理、宛名管理(オンライン・オフライン)、個数管理、進捗モニターなど多数の納入実績を有し、又、これにとらわれず新聞印刷工場の入口から出口まで網羅した一貫システム、更には新聞社間の協業印刷に対応したシステムとして提案することもできます。

また、工場の省エネルギー化や環境への配慮は今後の課題であり、これらに関する包括的サービスをご提案して参りたいと考えています。今後も、お客様に愛される製品をご提案、ご提供して参る所存です。

(株)日立製作所

第36回年末全体会議開く

日本新聞製作技術懇話会は、活動状況を中間総括する年末全体会議を12月13日午後4時から日本プレスセンター内で開催した。会議には35社の会員社から44名が出席、清水忠日本新聞協会技術委員長、富田恵同編集制作部長、辻唯志同主管を来賓に迎えた。

芝会長が冒頭「今年も会員社にはご苦勞が多かった、来年はもう少しよくなるよう期待したい。今日はどう努力していくか、反省や展望を含めて話し合いができればと思っている」と述べた。続いて挨拶に立った清水委員長は「新聞社の我が儘を聞いていただき協会加盟社を代表して1年間のお礼を言う。新聞社にとっても変革の時代、一緒になって新聞業界のため進んでいきたい」と呼び掛けた。富田部長からは「まず2012年のJANPSを盛り上げるため、協会と懇話会で検討会がスタートした。テーマや展示物について加盟紙アンケートを実施、1月には集計結果が出るのでお伝えする」との話があった。

議長に芝会長を選出し、評議員会(報告上坂義明副会長)、クラブ委員会(小股文雄委員長)、企画委員会(村松哲副委員長)、広報委員会(辻裕史委員長)からそれぞれ中間報告があった。

議案に移り、事務局から23年度事業計画の説明があり、拍手をもって了承した。内容は、①10月9日(日)～15日(土)のCONPT-TOUR2011の派遣②JANPS2012準備年にあたり、5月の定時総会当日に準備会合を開催する③技術懇談会、国内研修会は例年通りに実施する④会報「CONPT」を従来通り年6回発行——などである。

重要行事として1月7日(金)に新聞人新年名刺交換会、5月末に定時総会、12月に年末全体会議を開くこともあわせて了承し、会議を終えた。

第107回技術懇談会記

〈酒井寛氏への感謝の集い〉

5月に退任された酒井前マネージャーの“感謝の集い”が、12月13日(金)年末全体会議終了後の懇親会と併せて、プレスセンター内の宴会場にて行われた。

会員33社54名と会友6名の方々が参加、都合により出席できず、記念品に参加いただいたのは5社5会友に他3名の方となった。

会は芝会長の乾杯の挨拶で幕を開け、7年の長きに渡って懇話会を切り盛りされた酒井前マネージャーに対する感謝と労いの言葉とともに、その退任を惜しまれた。

記念品贈呈が行われ、副賞としてのゴルフボール3ダースはシングルハンの酒井氏が一生かかっても使いきれないのではとの笑いも生まれ、各所で思い出話の花が咲いた。

感謝のスピーチが始まり、藤間副会長はゴルフにまつわる話をメインに、小股クラブ委員長は懇話会事務所の引っ越しで発揮された几帳面さと行動力、会友の正田章氏からはCONPT-TOURで連続参加した時のエピソードを、各々心のこもった言葉が送られた。また、飛び入りでスピーチしていただいたJTBの西岡氏からもゴルフの話が出て、集いは一層和やかになった。盟友ともいえる木村禮氏もかけつけ、50年にも及ぶ付き合いの中でも印象に残るアメリカ珍道中を披露された。

そして、酒井氏からは懇話会やCONPT-TOUR等の7年間の思い出話などをおりまぜて謝辞が述べられた。

いつまでも話題は尽きず、話は弾んだが、最後に上坂副会長が、JANPSでのCONPT-TOUR同窓会開催の裏話(酒井氏の努力の賜物)をし、自らはエージシュートならぬウェイトシュートをめざすと結び、酒井氏と出席者の益々の健勝を祈念して一本締めで中締めを行い、感謝の集いを打ち上げた。

(コニカミノルタビジネスソリューションズ 平井泰之 記)

日本新聞製作技術懇話会 会員名簿 (45社) 平成23年1月1日現在

社 名	〒番号	所 在 地	連 絡 先
(株)イリス	141-0021	品川区上大崎3-12-18	03-3443-4695
NECエンジニアリング(株)	270-1198	我孫子市日の出1131	04-7185-7722
岡本化学工業(株)	335-0004	蕨市中央2-6-4	048-431-4816
(株)加貫ローラ製作所	131-0043	墨田区立花4-8-23	03-3619-6301
(株)KKS	146-0092	大田区下丸子1-15-21 三葉精機ビル3階	03-5482-5481
(株)金陽社	141-0032	品川区大崎1-2-2 アートヴィレッジ大崎セントラルタワー6階	03-5745-6221
クオード・テック・インク日本支店	336-0034	さいたま市南区内谷3-11-26	048-839-8831
コニカミノルタビジネスソリューションズ(株)	103-0023	中央区日本橋本町1-5-4	03-5205-7820
コダック(株)	101-0062	千代田区神田駿河台2-9	03-5577-1200
(株)ゴス グラフィック システムズ ジャパン	350-1328	狭山市広瀬台2-5-15	04-2954-1093
サカタインクス(株)	112-0004	文京区後楽1-4-25 日教販ビル	03-5689-6666
清水製作(株)	108-0023	港区芝浦3-17-10	03-3451-1261
西研グラフィックス(株)	144-0051	大田区西蒲田8-22-2 第二丸信ビル1階	03-5713-7717
第一工業(株)	335-0002	蕨市塚越7-2-8	048-441-3660
DICグラフィックス(株)	103-8233	中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル	03-3278-1247
田中電気(株)	101-0021	千代田区外神田1-15-13	03-3253-2816
(株)椿本チエイン	108-0075	港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6703-8402
東京インキ(株)	114-0002	北区王子1-12-4 TIC王子ビル	03-5902-7625
東機エレクトロニクス(株)	146-0092	大田区下丸子1-15-21	03-3756-3718
(株)東京機械製作所	108-8375	港区芝5-26-24	03-3451-8172
東芝ソリューション(株)	105-6691	港区芝浦1-1-1	03-3457-4410
東洋インキ製造(株)	104-0031	中央区京橋2-3-13	03-3272-0720
東洋電機(株)	101-0047	千代田区内神田1-18-12 内神田東誠ビル3階	03-5282-3306
東和電気工業(株)	104-0032	中央区八丁堀1-7-7 長井ビル6F	03-6222-5005
(株)ニコン	100-8331	千代田区有楽町1-12-1	03-3216-2065
ニッカ(株)	174-8642	板橋区前野町2-14-2	03-3558-7861
ニチロ工業(株)	221-0864	横浜市神奈川区菅田町2800	045-475-7229
日本アイ・ビー・エム(株)	103-0015	中央区日本橋箱崎町19-21	03-3808-7026
日本システム技術(株)	105-0001	港区虎ノ門1-17-1 虎ノ門5森ビル	03-3595-6753
日本新聞インキ(株)	108-0075	港区港南1-8-27	03-3450-5811
日本電気(株)	108-8557	港区芝浦2-11-5 五十嵐ビル5階	03-5476-4656
日本ボールドウィン(株)	108-0023	港区芝浦4-13-23 MS芝浦ビル6階	03-5418-6124
日本ユニシス(株)	135-8560	江東区豊洲1-1-1	050-3132-1498
パナソニックSNグラフィックス(株)	253-8587	茅ヶ崎市赤松町13-13	0467-55-2410
(株)日立製作所	140-8573	品川区南大井6-26-2 大森ベルポートB館	03-5471-2142
富士フイルムグラフィックシステムズ(株)	101-8452	千代田区神田錦町3-13 竹橋安田ビル	03-5259-2322
富士通(株)	105-7123	港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター	03-6252-2625
富士薬品工業(株)	176-0012	練馬区豊玉北3-14-10	03-3557-6201
方正(株)	140-0014	品川区大井1-24-5 大井町センタービル5F	03-5746-2651
ボッシュ・レックスロス(株) サーボシステム事業部	150-0002	渋谷区渋谷3-6-7 ボッシュビル4階	03-5485-7240
三菱重工印刷紙工機械(株)	144-0033	大田区東糀谷4-6-32	03-3744-2951
三菱製紙(株)	100-0005	千代田区丸の内3-4-2 新日石ビル7階	03-3213-3743
ミューラー・マルティニジャパン(株)	174-0042	板橋区東坂下2-5-14	03-3558-3131
明和ゴム工業(株)	146-0092	大田区下丸子2-27-20	03-3759-4621
(株)メディアテクノロジージャパン	102-0074	千代田区九段南2-3-14 靖国九段南ビル	03-3237-3147

CONPT